発　行
北海道ポーランド文化協会
〒060-0018
札幌市中央区北 18 条
西 15 丁目 3-19 安藤方
電話・FAX 011-556-8834
hokkaidopolandca@gmail.com
http://hokkaido-poland.com/

POLE

第 88 号 2016.4.25
北海道ポーランド文化協会 会誌

北海道ポーランド文化協会
東京事務所
〒107-0052
東京都港区赤坂 9-6-29-309
音響計画株式会社 霜田気付
電話 03-6804-1058
FAX 03-6804-6058

午後のポエジア Part6

第76回例会

朗読と
お茶の会へ
ご招待

どなたも入場無料
ケーキつき

予約不要。直接会場へ
お越しください！

2016. 6 / 4 (土)
開演 PM 2：00
(開場 30 分前)
北大クラーク会館 3F
国際文化交流活動室

今年の《午後のポエジア》は北大祭の真っただ中、この時期北大は一番美しく、大勢の人々でにぎわいます。午前中は北大祭、午後はポエジアというコースはいかがですか。

第Ⅰ部はポーランド人・日本人による詩や短歌、エッセイなどの朗読。第Ⅱ部はアトラクションの競演。笑いあり、高揚あり、感動あり。つづくお茶会は、いつも人気のポーランド人手作りのケーキのほか、サプライズもあるかもしれません。

北大祭に負けない楽しい会にしようと張り切っています。お友達を誘ってお気軽にご参加ください。

（小林暁子）

ポーランド広報文化センター
INSTYTUT POLSKI TOKIO

共催：ポーランド広報文化センター、後援：札幌市・札幌市教育委員会。写真は昨年、一昨年の様子。

第６回「午後のポエジア」スケッチ

若松　雅迪

友人霜田千代麿さんからのご指示で小林暁子さんに「今日は帰れない」を歌うとお伝えしたところ、キーボード伴奏までしていただくことになった。

前日は打ち合わせも済みリハーサルを開始、他の朗読の方々のエンジンもかかる頃、用意した配布資料7ページを 10 分に収める「朗読と歌と語り」を決める。千代麿さんが駄目出しをしてくださった。

当日、狭くはないホールに並ぶ椅子の数は数十。まずラファウ・ジェプカさん、栗原朋友子さんの司会で、進行予定はポーランドの少女たちの到着に左右されるとか、持ち時間の 10 分も怪しくなった。

とにかく斎田さんとレナタさん、小林さんとミハリナさん、二組の朗読に続けて始めた。歌は、江別の小劇場では伴奏の音源に合わず失敗だったから、安藤むつみさんに合わせていただく贅沢。朗読も語りも長過ぎずに終え、歌い始めた。伴奏が奇麗で大成功。パルチザンの悲劇も伝え得た。

つづいて、朗読にも衣装が抜群の効果ありと魅せてくださった熊谷敬子さん、自信に溢れお見事。

斉藤征義さんの朗読は草野心平の「蛙」関連3篇。いつもより熱が入って新境地の盛り上がり。「ぎゃわろっ」はじめ、まるで新蛙語を聴くようだ。岩見沢で拝聴した若松丈太郎さんの詩は、お寺の講堂が広すぎて難聴の私には聞き取れなかったので、一安心。征義さんはこうでなくっちゃ。

宮沢賢治の「無声慟哭」3篇は高校の教科書などでお馴染みゆえ、かえって朗読は難しいのだが、多少のご不自由を着席朗読でクリアされた松永吉史さん。後で歌誌『由紀坐左』のお仲間と知り、わが記憶障害にあきれた。

三味線の花季汀蘭さんは流石。この優美な楽器にポーランドの皆さんも興味を持たれたことだろう。折しも北大祭で立ち寄った若者にもいい刺激だ。

さて、最後はメインの即席高座。木魚、篠笛などが用意され、千代麿さんの一人芝居が始まった。愚安亭遊佐さんの向こうを張る出色の熱演。

演目が全て若松丈太郎さんの詩とは嬉しい。3.11 以前から知る人ぞ知る福島の大詩人、最近ようやく北海道にも、岩見沢のお寺や江別の小劇場を拠点に広まってきた。埴谷雄高研究の古くからの先輩で、福島第一の爆発以前から警鐘を鳴らされていた丈太郎さんを、千代麿さんがお寺に招いたのは一昨年の花祭だったなあ。

一人芝居は端で見るほど楽なものではない。高座の役割を担う半畳の畳が恰好の舞台装置となって、フィナーレを飾るにふさわしいパフォーマンスだった。万場の拍手鳴りやまず。福原光篠さんの篠笛の小気味好さも手伝って、初めて接した皆さんにも大いに感動していただけたのではないか。

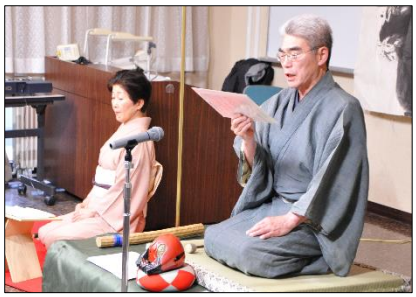
その後はケーキと餃子の大サービス。さらにプロのヨアンナ・ヴィシュコフスカ先生がダンスを教えてくださった。生徒は老若男女 30 人。ステップの基礎、ボックス、ターンと、司会のラファウさんの通訳で大事な基本を短時間で教えてくださった。私のような元壁際青年にも十分理解できたが「解る」と「踊る」は大違い、汗だくになった。子供たちには容易なのだろうが、楽しそうに輪に入ってくれた。ご参加の皆さんも十分満足されたに違いない。

協会の皆さんの「打ち上げ」にも図々しく参加して話題も尽きず、文字通り美味しいお蕎麦屋さんでの会で、初参加で新会員になってしまった。

（わかまつ　まさみち）

出演者一同
（左４番目が筆者）

〈司会〉
栗原朋友子、
ラファウ・
ジェプカ



（左上から）1 レナタ・シャレック&斎田道子、2 ミハリナ・ミコワイチャック&小林暁子、3 若松雅迪、4 熊谷敬子、5 斉藤征義、6 松永吉史、7 菅原みえ子
9 浅井雄介、10 バルバラ数井、12-13 福原光篠&霜田千代麿、11 花季汀蘭、8 長屋のり子

（左下から）14 河村恵李アンナ&明希カリナ、懇親会（安藤厚会長、小笠原正明副会長）
〈ダンス〉ミコワイ・ジェプカと仲間たち、15〈ダンス指導〉ヨアンナ・ヴィシュコフスカ
（敬称略、数字はプログラム番号、写真：尾形芳秀）

第６回「午後のポエジア」より

タデウシュ・ルジェーヴィチ

生き残り

ぼくは二十四歳
屠殺場へ引かれて行き
生き残っていた。

ここに掲げる名は無意味な同義語だ――
人間と動物
愛と憎しみ
敵と友
闇と光

人間は動物なみに殺される
ぼくは見ていた――
屠殺された人間を積んだ荷馬車を
彼らは救済されることはない。

概念は単なる語にすぎない
美徳と悪徳
真実と虚偽
美と醜
勇気と臆病

美徳と悪徳は　重さが同じだ
ぼくは見て知っていた――
不品行で同時に徳の高かった
一人の人物を

ぼくは教師で師匠である人物を求める
その人がぼくに視力と聴力と言語を取り戻し
いま一度、事物と概念に名を与え
光を闇から切り離してくれるように、願う。

ぼくは二十四歳
屠殺場へ引かれて行き
生き残っていた。

詩集『不安』*Niepokój*（1947）より
栗原成郎訳

《解説》 タデウシュ・ルジェーヴィチ（1921−2014）はラドムスコ Radomsko（チェンストホヴァ北方の小さな町）に生まれました。第2次大戦中は「国民軍」のパルチザン兵士でした。その点ではアンジェイ・ワイダ監督の映画『灰とダイヤモンド』の主人公マチェックと同世代の人です。この詩は1人称単数の詩的独白の形式をとっていて、「二十四歳のぼく」はナチス・ドイツ軍と地下組織で戦い、ナチスの降伏によって「生き残った」が、戦後のソ連型共産主義へ豹変したポーランド政府からは「ロンドン亡命政府」に協力した廉（かど）で政治的犯罪者扱いされて行き場を失った「死によって汚染された」若い世代を代表しています。この詩を収めた詩集『不安』によってルジェーヴィチは彗星のごとく戦後の詩壇に登場しました。現在も人気のある詩人です。

アウシュヴィッツ、マイダネック、トレブリンカをはじめ複数存在した強制収容所は、ポーランドでは「ヒトラー絶滅収容所」と名付けられているように「人間が動物なみに集団殺戮された」まさに「屠殺場」でした。ルジェーヴィチの兄はゲシュタポ（ナチの秘密警察）によって銃殺されました。パルチザン兵士のルジェーヴィチ自身は収容所の囚人ではありませんでしたが、約束されたソ連軍の援軍は来ず、武力に勝るドイツ軍との戦闘の場は抵抗不能の「屠殺場」にすぎませんでした。そして戦争直後のポーランド社会では、文化も、言語も、道徳も、宗教もすべての価値が崩壊しました。光と闇、人間と動物、愛と憎悪、美徳と悪徳、真実と虚偽などのアンチテーゼが対立の意味を失い、同価値のものとなり下がった混沌が出現しました。

ルジェーヴィチは混沌からの世界の再創造を希求します。無から有を、闇から光を創造してくれる「教師」を探し求めていますが、それは人間を超えた存在であることを暗示しています。（栗原成郎）

ルジェーヴィチ（左）とギュンター・グラス（2006）
Photo: Michał Kobyliński

若松丈太郎

「北緯37度25分の幻像と幻聴」について

霜田千代麿

原題は、「暑湿の労に神（しん）をなやまし」となっている。詩人の言に依ると「古くから北緯37度25分ゾーンは日本のエネルギー供給基地としての役割をになってきた」ことがあきらかになって来た。それは、また、芭蕉の旅した「奥の細道」のルートとも重なる。

この詩では、芭蕉が「奥の細道」旅の途中、強い体の不調におそわれる。それが現在の新潟県の刈羽原発の出来事として、詩人は芭蕉の口を借りて〈予言〉〈告発〉している。

そして三〇〇年後、二〇一一年三月十一日福島第一原発の事故と地震、つなみが現実に起こった。

〔了〕